宮城県文化財調査報告書第189集

沢田山西遺跡

―三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ―

平成14年3月

宮城県教育委員会

沢田山西遺跡

── 三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ ──

序　　文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器の普及は一般化し、これら無くしての社会生活は考えられない時代となりました。これらの情報通信技術や情報処理技術はますますこれからも進歩し、我々の社会生活や世の中の仕組みまでも変えていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって我々の行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性はますます増してきていると言って良いでしょう。

歴史は、過去に起こった、あるいは行われたこと、つまり事実の積み重ねから明らかにされていかねばなりません。特に地域との結びつきの深い埋蔵文化財は、情報の共有化により均質化する地域の、個性ある歴史を明確にするためにも欠くことのできない位置を与えられてきています。しかし、埋蔵文化財は道路や住宅の建設、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発などに関係する機関に遺跡の所在を周知徹底すると共に、開発とかかわりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設工事に先立って実施した沢田山西遺跡の発掘調査報告書です。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡の保存にご理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係各機関をはじめ、調査にあたり多大なるご協力をいただいた地元教育委員会に対し、深く感謝申し上げます。

平成14年3月

宮城県教育委員会

教育長　千　葉　眞　弘

目　　次

第Ⅰ章　はじめに……1
　1．遺跡の位置と地理的環境……1
　2．周辺の遺跡……1
第Ⅱ章　調査の方法と経過……4
第Ⅲ章　発見された遺構と遺物……5
第Ⅳ章　考察とまとめ……13
引用・参考文献……13
写真図版……15

例　　言

1．本書は三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設に伴う沢田山西遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が行ったものである。

3．本書に使用した土色の記述は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を参照した。

4．本書に使用した各遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を複製して使用した。

5．本書は調査員全員の協議を経て、須田良平が執筆・編集した。

6．発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺 跡 名：沢田山西遺跡（さわだやまにし）（宮城県遺跡地名表記載番号66075、遺跡記号ＳＡ）

所 在 地：宮城県桃生郡河北町小船越字沢田

調査原因：三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

　　柳沢和明・茂木好光・西村力・須田良平・吉野武・引地弘行・稲毛英則

調査期間：平成12年（2000年）９月４日～９月13日（試掘調査）

　　平成13年（2001年）４月９日～４月20日・11月１日～11月13日

調査対象面積：3,400㎡

調査面積：2080㎡

調査協力：河北町教育委員会・国土交通省仙台工事事務所

第Ⅰ章　は　じ　め　に

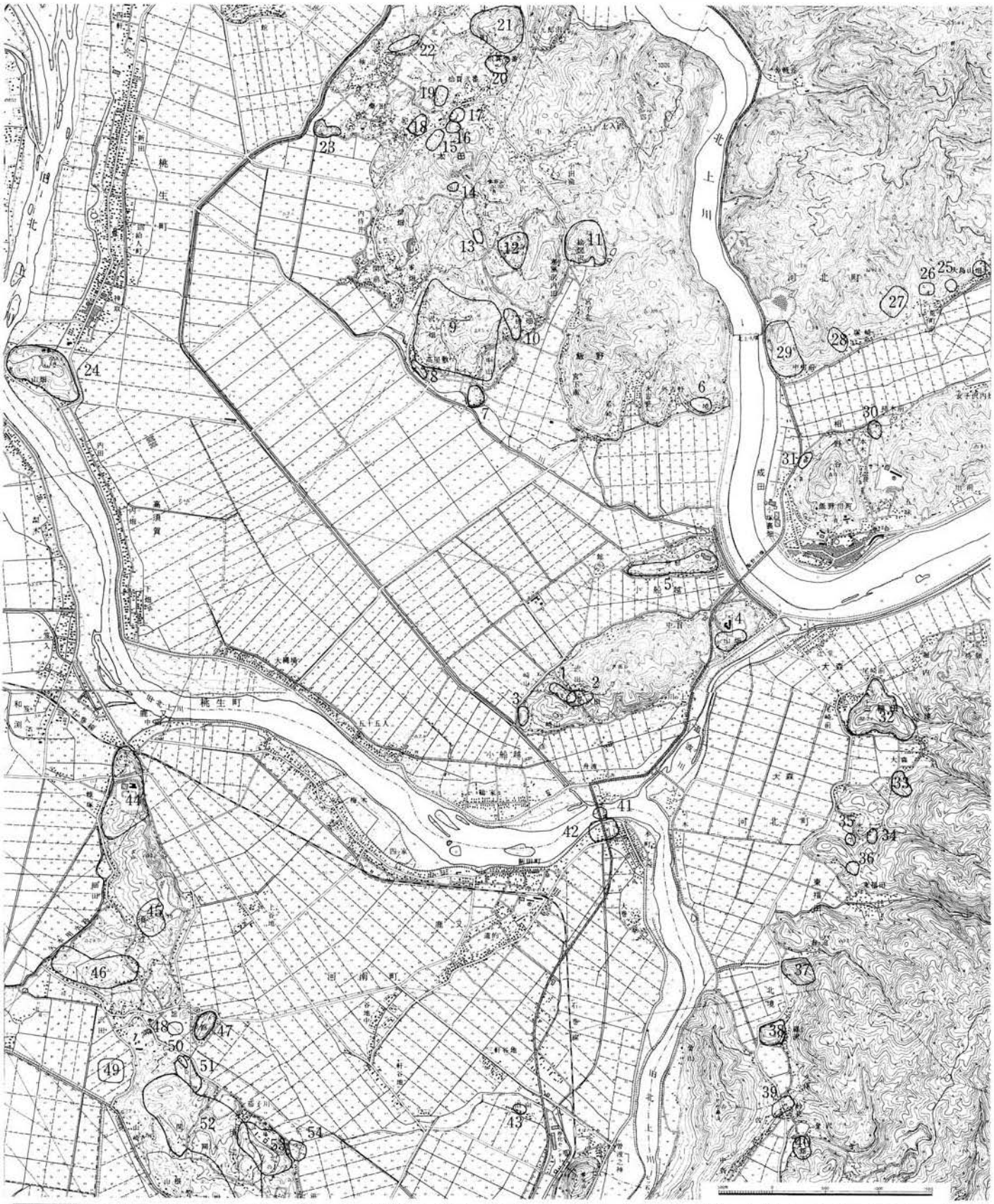
1．遺跡の位置と地理的環境

沢田山西遺跡は桃生郡河北町小船越字沢田に所在する。河北町役場の南西約2.7km に位置し、北上川（追波川）と旧北上川に挟まれた独立丘陵上に立地する。この丘陵は、北上山系の南端付近に位置し、北上山地から西南西に延びる丘陵の先端が、北上川により分断され独立丘陵となったものであり、中心部に位置する標高119.7mの沢田山からやや急な傾斜を持って標高３mの沖積地に接している。周辺の丘陵と同様にこの丘陵にも平坦地は少ない。遺跡は沢田山と丘陵先端の標高59mの頂部に挟まれた鞍部に位置し、北西－南東に細長い標高36.7mを頂点とする独立丘陵上に立地する。この丘陵の東および南斜面は比較的緩やかで、縄文時代後・晩期の沢田山貝塚もこの斜面に立地する。

2．周辺の遺跡

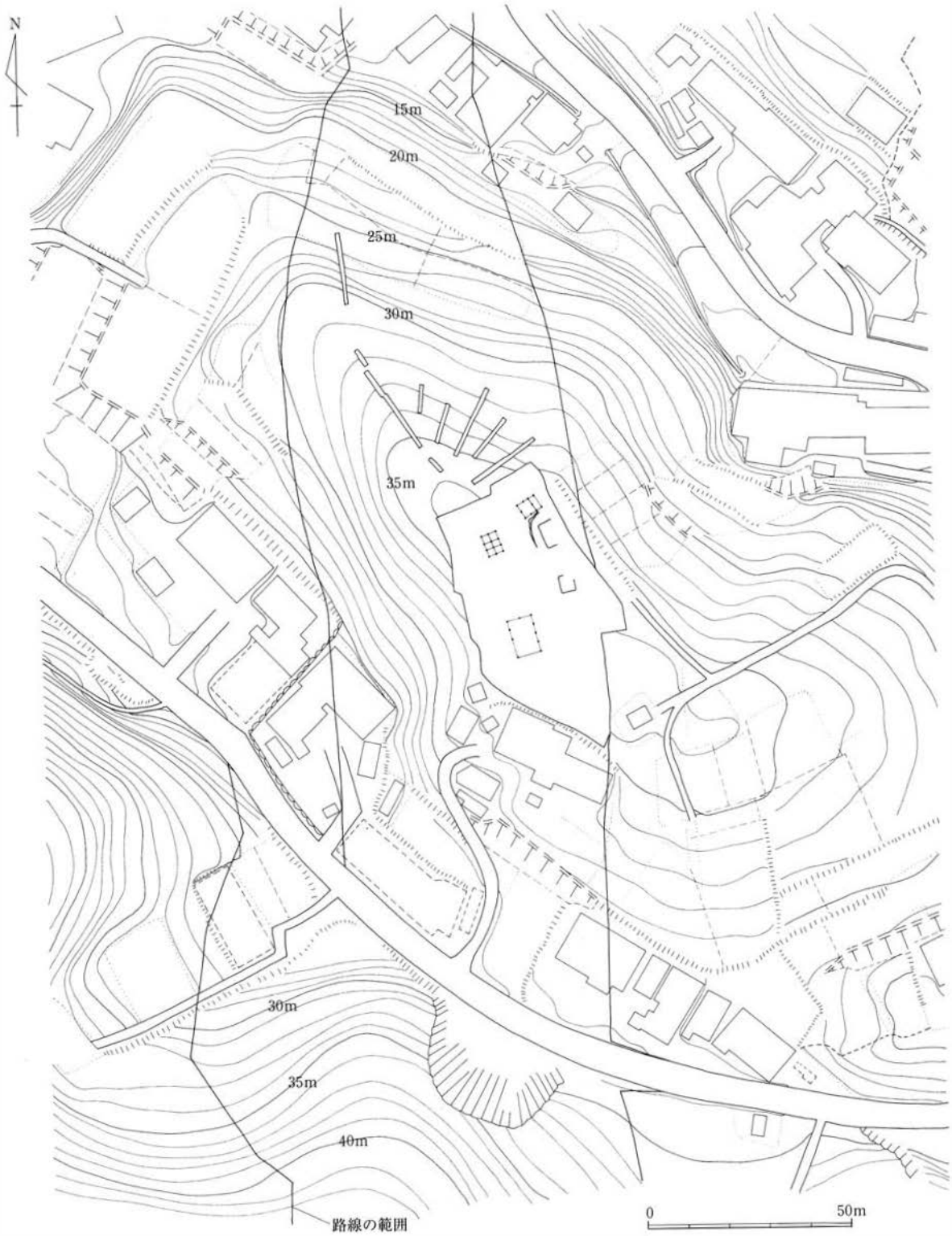
遺跡周辺の北上川下流域の山地帯は北上山系に属するが、当該地域では比較的急峻な丘陵部と沖積層が厚く堆積した平野部が直に接しており、平坦な地形を作り出す河岸段丘面がほとんど発達しない。そのため、傾斜地の多い当該地域には黒色土層や火山灰堆積層が堆積せず、三畳紀やジュラ紀の基盤層の上に薄い腐植土層や基盤崩落土が認められる。遺跡の北約3.5km には奈良時代の城柵官衙遺跡として知られる桃生城がある。『続日本紀』によると、桃生城は天平宝字２（758）年から造営が始まり、翌３（759）年秋頃には完成し、宝亀５（774）年７月に海道の蝦夷の攻撃により一部が破壊されたことなどが知られている。宮城県多賀城跡研究所により調査研究が進められている。桃生城の東隣には当遺跡と同じように三陸縦貫自動車道建設に伴い今年度調査が行われた新田東遺跡がある。桃生城の存続期（８世紀第３四半期頃）の大規模な集落跡で、５軒の焼失住居を含む42軒の竪穴住居跡や15棟の掘立柱建物跡、井戸跡、土壙などが検出され、桃生城の造営、維持に携わった人々（柵戸や鎮兵）の集落として位置づけられている。この他、古墳時代前期や平安時代の竪穴住居跡も検出された。また、太田窯跡では奈良時代の須恵器や瓦を生産し桃生城に製品を供給している。遺跡の南西約４km に位置し南北に連なる須江丘陵には

第１図　沢田山西遺跡の位置



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	沢田山西遺跡	丘陵	集落	古代	19	拾貫壱番遺跡	丘陵斜面	散布地	奈良・平安・近世	37	小枝館跡	丘陵	城館	中世
2	沢田山貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文後期・晩期	20	日高見神社遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳後期	38	北境館跡	丘陵	城館	中世
3	崎山遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	21	阿倍館跡	丘陵麓	城館	中世	39	南境貝塚	丘陵	貝塚	縄文早期～晩期
4	七郎館跡	丘陵斜面	城館・散布地	古代・中世	22	角山遺跡	丘陵	集落	奈良・平安・中世・近世	40	南境館跡	丘陵	城館	中世
5	後谷地遺跡	丘陵	散布地	古代	23	太田館跡	丘陵麓	城館	中世	41	本鹿又遺跡	自然堤防	散布地	弥生
6	外吉野遺跡	丘陵麓	散布地	古代	24	神取山城跡	丘陵	城館・窯跡	中世・近代	42	御塩蔵場跡	自然堤防	塩蔵	近世
7	飯野館跡	丘陵麓	城館	中世	25	大島遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	43	沼向遺跡	自然堤防	散布地	古墳～平安
8	高屋敷遺跡	丘陵麓	散布地	古代	26	和泉沢遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	44	須江鷲塚遺跡	丘陵	集落・窯跡・城館	縄文中期・古墳前期・奈良・平安・中世
9	桃生城跡	丘陵	城柵	古代	27	和泉沢古墳群	丘陵	古墳群	古代	45	細田遺跡	丘陵斜面	散布地・窯跡	縄文・平安
10	新田東遺跡	丘陵	包含層・集落	縄文前期・古代	28	相野谷館跡	丘陵	館跡	中世	46	須江瓦山A窯跡	丘陵	窯跡	奈良・平安
11	赤間館跡	丘陵斜面	城館	中世	29	山崎館跡	丘陵	館跡	中世	47	塩野田城跡	丘陵	城館	中世
12	問答山遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	30	日影貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文前期	48	池袋遺跡	沖積平野	散布地	
13	万歳山A遺跡	丘陵	散布地	縄文	31	成田遺跡	丘陵	散布地	古代	49	鶯の巣遺跡	自然堤防	散布地	古墳
14	万歳山B遺跡	丘陵	散布地	奈良・平安	32	大森城跡	丘陵	城館	中世	50	代官山横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳・古代
15	細谷B遺跡	丘陵斜面	散布地	奈良・平安	33	萱館跡	丘陵	城館	中世	51	代官山遺跡	丘陵	散布地	縄文後期・奈良・平安
16	細谷遺跡	丘陵	散布地	縄文晩期・古代	34	大土B遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	52	関ノ入遺跡	丘陵斜面	集落・窯跡	縄文前期～後期・古墳前期・奈良・平安・中世・近世
17	宗全山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	35	大土A遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	53	長者館跡	丘陵斜面	散布地・城館	縄文・奈良・平安・中世
18	太田窯跡	丘陵	窯跡・集落	奈良・平安	36	東福田遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	54	新山崎遺跡	自然堤防	集落・方形周溝墓	古墳前期～平安・中世・近世

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第3図　調査区の位置

須江糠塚遺跡や関ノ入遺跡、須江瓦山窯跡など奈良時代から平安時代前半までの集落や瓦や須恵器を生産した窯跡などが集中し、古代の大規模な生産遺跡群である。遺跡の北東約4.8km には県指定史跡の和泉沢古墳群がある。直径３～９ｍ、高さ１ｍほどの割石を積み上げた約50基の小円墳からなり、蕨手刀や鉄斧、須恵器、土師器が石室に副葬されていた。９～10世紀の築造年代とみられている。以上のように、周辺の遺跡は丘陵に立地するものがほとんどで、数少ない平野部に位置する遺跡も自然堤防上に立地している。水田、畑などの生産遺構に関してはまったく不明であり、今後の調査・研究の進展に待つべき部分が大きい。

第Ⅱ章　調査の方法と経過

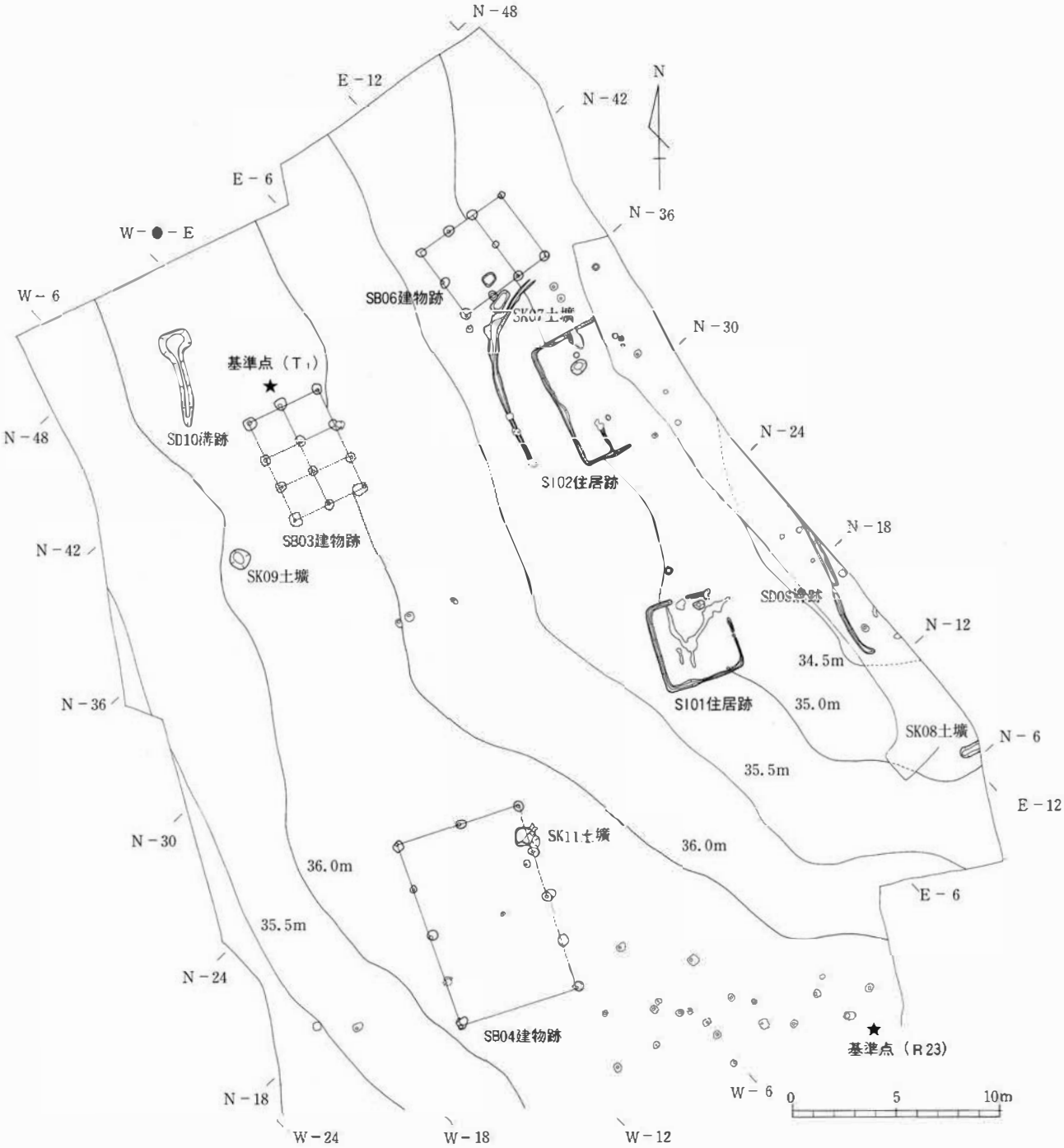
本調査は三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設に伴うものである。調査の対象となった道路路線敷は丘陵西半を斜めに横切る形で設定されており、範囲内の南部は人家で削平され、やや平坦な中央部東側は畑として利用されていた。また西および北斜面は急傾斜で杉が植林されていた。まず昨年度９月に行った試掘調査の結果をもとに、ただちに調査に着手することができる平坦な畑地で、遺構の状況が明らかな調査対象区の南東側を４月９日から20日に調査した。そして11月１日からは樹木の伐採の済んだ調査対象区北側及び西側の調査を行った。しかしこれらの地域は平坦面のほとんど無い傾斜地域で、トレンチ調査により遺構がまったく検出されなかったため、４月の調査の補足調査及び、全体の写真撮影、測量調査を行って13日にすべての調査を終了した。

先に述べたように、遺跡は丘陵上に立地する。尾根筋の標高の高い部分では厚さ20～40cm の表土の下に粘板岩の岩盤やにぶい黄褐色粘質土の基盤面が認められる。また、遺跡東側の標高の低い部分では厚さ30cm ほどの耕作土の下に後世の再堆積土である褐色～黒褐色のシルト質土が最大45cm の厚さで堆積している。遺構は尾根筋部分では基盤面で、東側斜面では再堆積土の下のにぶい黄褐色シルト質土で検出した。

検出した遺構は、調査区北部（Ｔ１）および南部（Ｒ23）に設けた任意の点を結んだ線を基準とした３ｍ×３ｍのグリッドをもとに、1/20 平面図・断面図や平板測量による 1/100 平面図を作成した。同時に35mm と６×７のモノクロ・カラーリバーサルによる写真記録も行った。グリッドの南北軸は座標北から約43°西に振れている。基準線の呼称はＲ23杭を基準として、東がＥ－３、Ｅ－６・・・、西がＷ－３、Ｗ－６・・・、北がＮ－３、Ｎ－６・・・とした。

基準点の国家座標は　Ｔ１……Ｘ＝－166,405.049　Ｙ＝39,819.028

Ｒ23……Ｘ＝－166.438.189　Ｙ＝39,849.470　である。


N－48
E－12
N－42
N
E－6
N－36
W－●－E
W－6
SB06建物跡
SK07土壙
N－30
基準点（T1）
N－24
N－48
SD10溝跡
SI02住居跡
N－18
SB03建物跡
N－42
SK09土壙
SD05溝跡
N－12
34.5m
N－36
SI01住居跡
35.0m
SK08土壙
N－6
35.5m
E－12
N－30
SK11土壙
36.0m
36.0m
E－6
35.5m
N－24
SB04建物跡
基準点（R23）
N－18
W－6
0
5
10m
W－24
W－18
W－12

第4図　遺構配置図

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡３棟、土壙４基、溝跡２条などである。いずれも調査対象区の中央付近の畑部分で、遺跡の中では比較的平坦ながら、標高の最も高い尾根筋から北東に傾斜する範囲で検出された。開墾時の削平のため遺構の残存状況はよくない。遺物は非常に少なく、竪穴住居跡から出土した土師器・須恵器などを中心に整理用平箱で１箱ほどである。

１．掘立柱建物跡

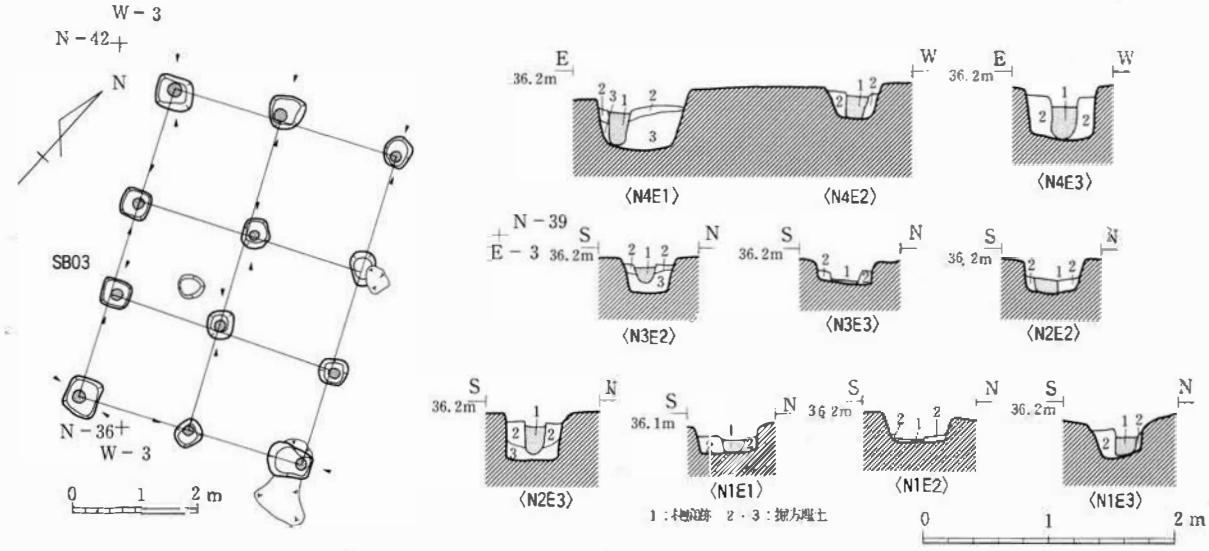
【SB03 建物跡】

調査区北寄りの、標高の一番高い尾根状部分で確認された。桁行３間、梁行２間の総柱建物跡である。柱穴は12ヶ所すべて検出しており、１ヶ所をのぞいて径16～22cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が西側柱列で総長5.1m、柱間寸法は北から1.9m、1.5m、1.7m、梁行は南妻で総長3.7m、柱間寸法は西から1.8m、1.9mである。方向はN－26°－Wである。

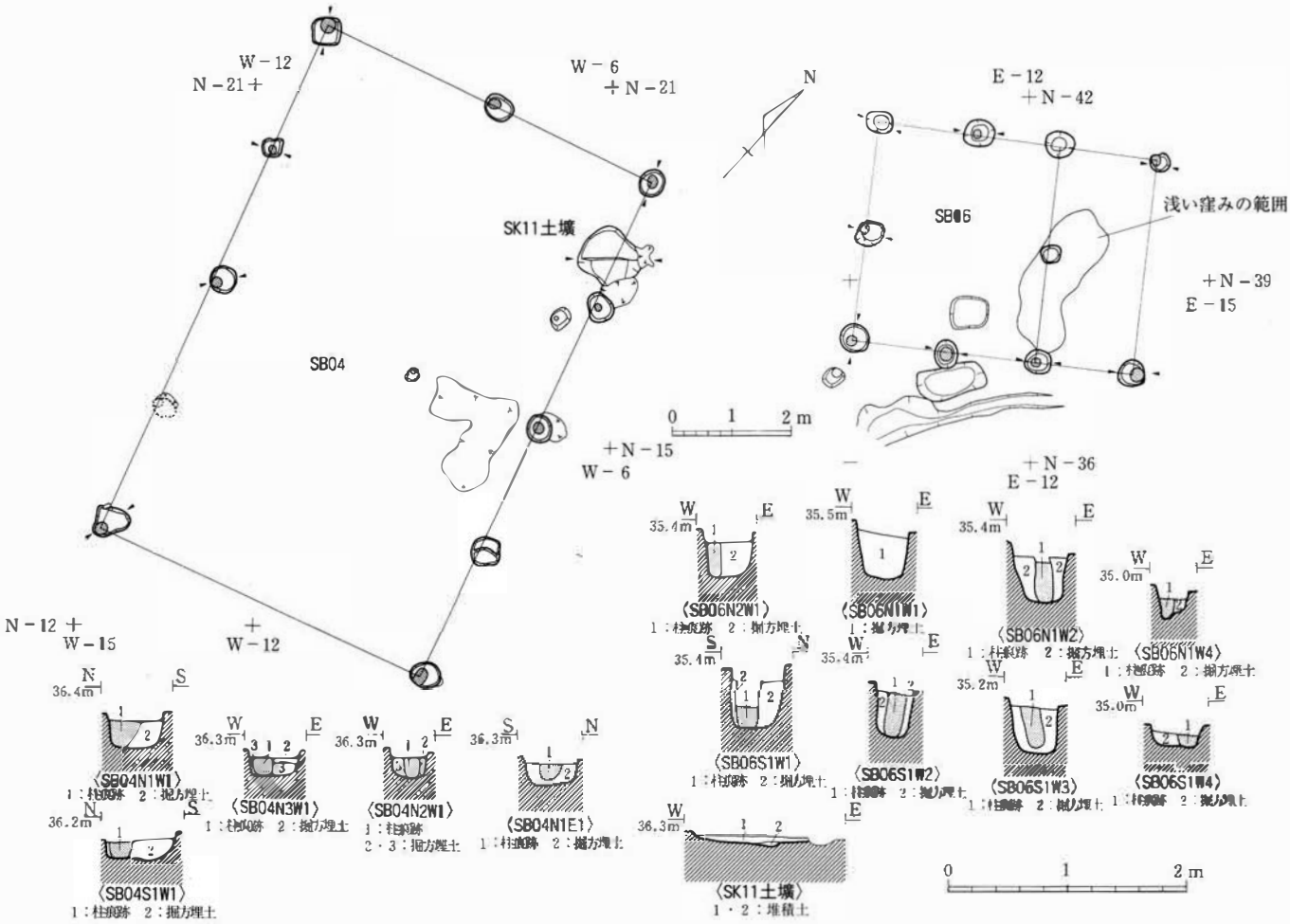
柱穴は隅丸方形を基調とし、長方形や楕円形に近いものもある。規模は長軸50～70cm、短軸40～50cm で深さは最大47cm である。埋土は地山礫を多く含む暗褐色あるいはにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SB04 建物跡】

調査区南寄りの、建物１と同じ尾根上部分で確認された。桁行４間、梁行２間の建物跡である。柱穴は10ヶ所検出しており、９ヶ所で径14～26cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が東側柱列で総長10.0m、柱間寸法は北から2.3m、2.2m、2.2m、2.3m、梁行は北妻で総長6.0m、柱間寸法は西から3.1m、2.9mである。方向はN－17°－Wである。



第５図　SB03 建物跡



第６図　SB04 建物跡・SB06 建物跡

柱穴は楕円形を基調とし、規模は長軸40～50cm、短軸30～40cm、深さは最大32cm である。埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SB06 建物跡】

調査区北寄りの、東側斜面で確認された。桁行２間、梁行２間の建物跡で、東に張り出しをもっている。柱穴は10ヶ所検出しており、７ヶ所で径14～22cm の円形の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行は西側柱列で総長3.7m、柱間寸法は北から1.8m、1.9m梁行が南妻で総長4.8m、柱間寸法は西から1.6m、1.5m、張り出しの柱間寸法は1.7mである。方向はE－35°－Nである。

柱穴は楕円形を基調とし、規模は長軸30～50cm、短軸30～40cm で深さは最大50cm である。埋土は地山礫を多く含むにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

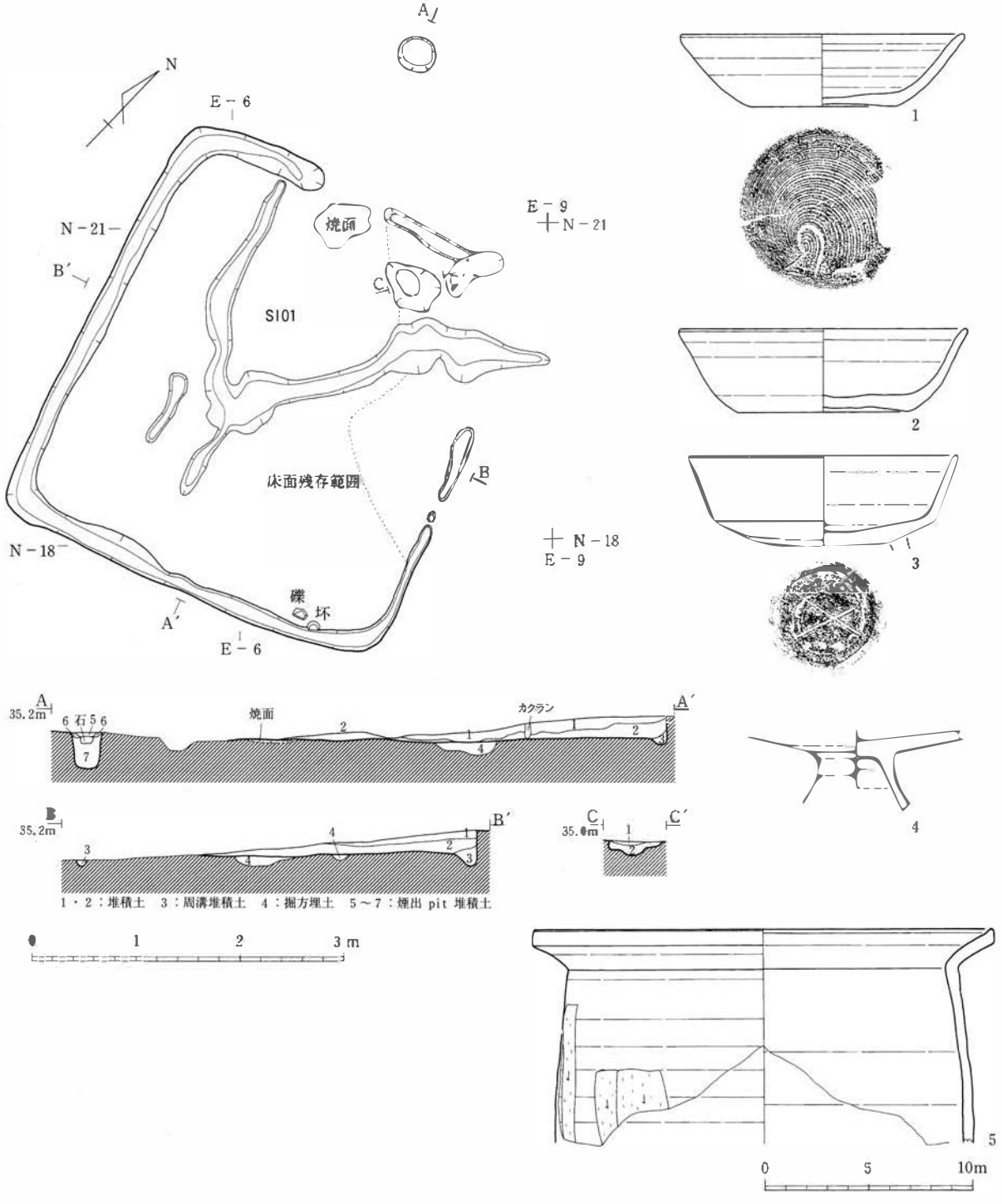
２．竪穴住居跡

【SI01 竪穴住居跡】

調査区中央東よりの東斜面で確認された。北東隅は削平のため壊されている。

［平面形・規模］東西3.8m、南北4.2mの隅丸方形である。

［堆積土］にぶい黄褐色シルト（１層）と褐色シルト（２層）が自然堆積している。



No	器種	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	床面	外面：回転糸切り→ロクロナデ	13.7	7.0	3.4	1/3	4-1
2	須恵器・坏	床面	外面：切離し不明→ロクロナデ	13.9	8.1	3.9	2/3	4-2
3	須恵器・高台坏	周溝土器集中	外面：回転ヘラ切り→ロクロナデ・高台部調整	13.0	10.6	(4.4)	2/3	4-3
4	須恵器・高坏	堆積土	外面：ロクロナデ	(10.4)	(5.2)	(3.9)	1/5	4-4
5	土師器・甕	煙出 pit 3 層	外面：ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ、内面：ヨコナデ	22.2		(10.3)	1/6	

第 7 図　SI01 住居跡

［壁］ほぼ直立する。高さは最も残りのよいところで22cmである。

［床面］中央付近を中心に溝状の掘方埋土と地山を床面としている。

［主柱穴］検出されなかった。

［周溝］削平のため検出できなかった北側を除いてほぼ全周で確認された。幅は８～26cm、深さは深いところで16cmある。

［カマド］北辺中央やや西寄りに周溝が途切れる部分が認められ、床面には長軸50cm、短軸40cmの不整形の焼け面が検出された。また北側には煙出しのpitが検出され、側壁や煙道は残存していないもののここにカマドがあったと思われる。煙出しpitの堆積土は炭化物や焼土ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

［貯蔵穴］住居北辺の東寄りにある。カマド東側壁の東脇にあったと思われる。長軸60cm、短軸45cmの不整形で中央部が一段窪んでいる。深さは16cmである。堆積土は炭化物や焼土ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルト（１層）と赤褐色シルト（２層）が自然堆積している。

［方向］東辺でN－16°－Wである。

［遺物］床面から須恵器坏、蓋が出土した。また南壁際東よりの堆積土下部からは、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・高台坏がまとまって出土した。須恵器坏には回転糸切り無調整のものがある。高台坏は回転ヘラ切りで、底部には焼成前の×状の刻書が認められ、高台部が剥がれている。この他、堆積土からは土師器坏・甕や須恵器坏・高坏・甕が少量出土した。土師器坏はロクロ調整、甕は非ロクロ調整である。須恵器坏は切離しは不明で、回転ヘラケズリ調整されている。また、煙出しpitの３層からはロクロ調整の土師器甕が出土している。

【SI02竪穴住居跡】

調査区北側東よりの東斜面、SI01竪穴住居跡の北約７mの地点で確認された。東側半分は削平のため壊されている。

［平面形・規模］南北6.1m、東西2.5m以上の隅丸方形であると思われる。

［堆積土］褐色シルトが自然堆積している。

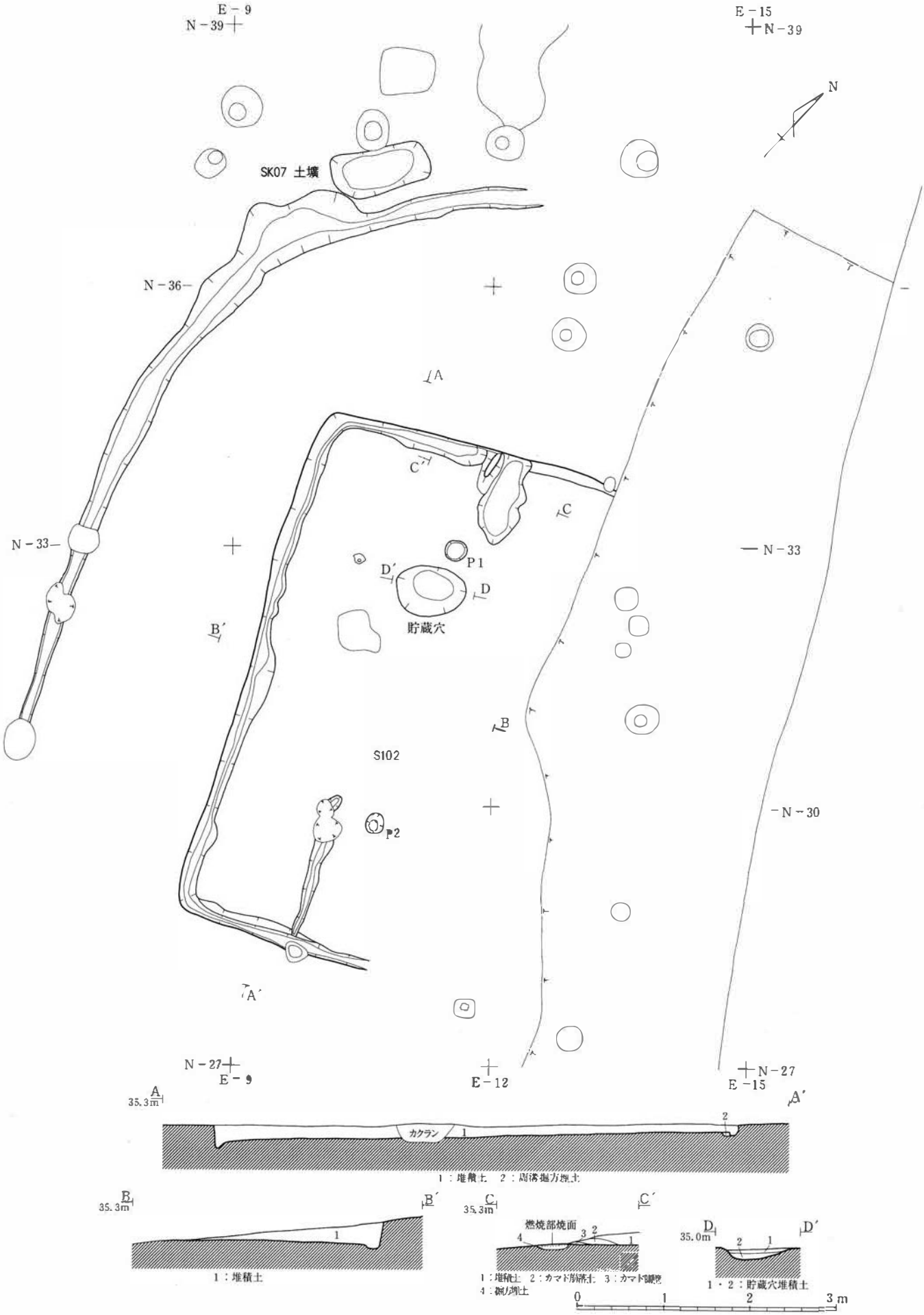
［壁］ほぼ直立する。高さは最も残りのよいところで25cmである。

［床面］地山を床面としている。

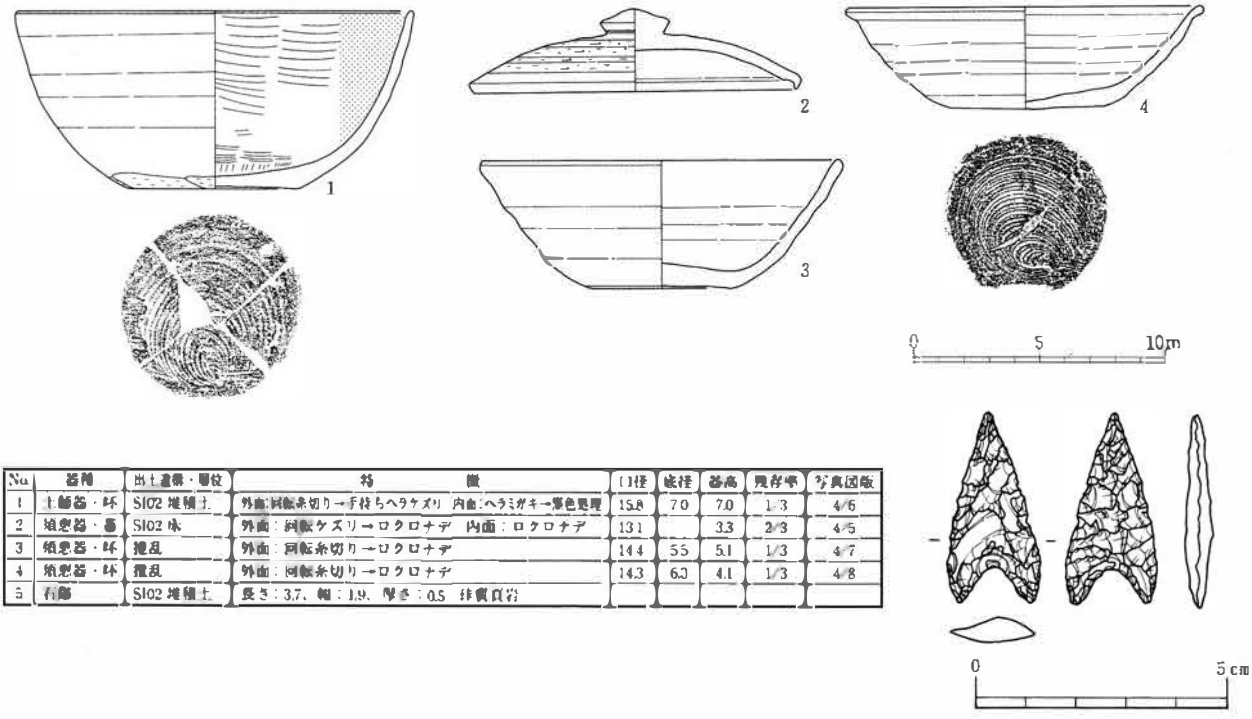
［主柱穴］西側の２ヶ所を確認した。掘方は長軸が23～25cm、短軸18～23cmの楕円形で、深さは16cmである。柱痕跡は検出されなかった。柱間寸法は3.3mである。

［周溝］削平のため検出できなかった東側半分を除いて全周で確認された。幅は12～28cm、深さは深いところで10cmある。後述するカマド部分から東では暗渠状になっており、カマド構築以前に埋戻されている。南辺中央付近には周溝の掘方が認められる。掘方とカマド部より東側の堆積土以外は住居の堆積土と同様であり、周溝に設置されていた壁材を抜き取った痕跡と思われる。

［カマド］北辺に付設されている。カマド側壁は黄褐色粘質土で構築されているが、残存状況は悪く、東の側壁は残っていない。西の側壁も削平などにより長さ50cm、幅20cm、高さ４cmほどが残存しているにすぎない。カマド側壁の上にはカマドの崩落土と思われる焼土ブロックや風化地山岩片を不均質


E－9
N－39
E－15
N－39
N
SK07 土壙
N－36
N－33
N－33
N－30
N－27
E－9
E－12
N－27
E－15
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
P1
P2
貯蔵穴
SI02
カクラン
1：堆積土　2：周溝掘方埋土
1：堆積土
燃焼部焼面
1：堆積土　2：カマド崩落土　3：カマド焼土
4：掘り埋土
1・2：貯蔵穴堆積土
35.3m
35.0m
0　1　2　3m

第8図　SI02 住居跡



No	器種	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	現存率	写真図版
1	土師器・坏	SI02 堆積土	外面:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面:ヘラミガキ→黒色処理	15.8	7.0	7.0	1/3	4/6
2	須恵器・蓋	SI02 床	外面：回転ケズリ→ロクロナデ 内面：ロクロナデ	13.1		3.3	2/3	4/5
3	須恵器・坏	撹乱	外面：回転糸切り→ロクロナデ	14.4	5.5	5.1	1/3	4/7
4	須恵器・坏	撹乱	外面：回転糸切り→ロクロナデ	14.3	6.0	4.1	1/3	4/8
5	石鏃	SI02 堆積土	長さ：3.7、幅：1.9、厚さ：0.5 非黒曜岩					

第９図　SI02 及び撹乱出土土器・石器

に含む黄褐色粘質土が堆積している。またカマド燃焼部の底面には長軸1.0m、短軸0.5mの不整形の掘方が検出され、その堆積土の上面は焼けて堅く締まっている。

［その他の施設］カマド東側壁の南側で楕円形の土壙を検出した。規模は長軸80cm、短軸60cm で、深さは15cm である。堆積土は炭化物・風化地山岩片（１層）、炭化物・焼土ブロック（２層）を多く含む褐色シルトで、人為的な埋土とみられる。また、床面南側で南壁と直交する溝跡を検出した。長さ1.8m、幅10～22cm、深さは最も深いところで６cm である。地山小ブロックを含む灰黄褐色シルトが堆積している。

［方向］西辺でN－25°－Wである。

［外周溝］住居の西辺から北辺にかけて検出した。外周溝の南側は住居の西辺と平行し北になるにつれ住居北辺に沿うように東に緩やかに湾曲する。住居との距離は西辺で2.2m、北辺で2.8m、確認面での住居西辺との高低差は最大25cm である。幅は12～50cm で北西側の湾曲部分が広くなっている。深さは深いところで10cm である。

［遺物］床面から須恵器蓋が出土した。堆積土からは土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕などの他、時期不明の縄文土器・石鏃も極少量出土している。土師器坏には回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整のものがある。土師器甕は非ロクロ調整である。須恵器坏は切離しは不明で、回転ヘラケズリ調整されている。

第Ⅳ章　考察とまとめ

1．遺物の年代

遺物の多くは竪穴住居跡の床面あるいは堆積土中から出土しており、土師器、須恵器の他、縄文土器や石器なども僅かに認められる。しかし、出土した遺物の総量は非常に少ない。土師器は坏と甕、須恵器は坏、高台坏、高坏、蓋、甕などがある。以下では、各竪穴住居跡出土の土師器、須恵器を中心に図示できた坏についてその特徴を述べる。

SI01 住居跡床面出土の須恵器坏は体部、口縁部が直線的に外傾し、底部の切離しの分かるものは回転糸切りで無調整である。堆積土からは底部の切離しは不明であるが、回転ヘラケズリ調整の須恵器坏やロクロ調整の土師器坏も出土している。SI02 住居跡堆積土出土の土師器坏は、体部が底部から内湾して立ち上がる椀型を呈し、底部は回転糸切りで、切離し後手持ちヘラケズリ調整されている。内面はヘラミガキ後黒色処理されている。この他、堆積土からは底部切離しは不明であるが、回転ヘラケズリ調整の須恵器坏も出土している。点数は少ないものの、このような特徴を持つ土器はほとんどのものは9世紀のものと考えられる。その他の土師器、須恵器についても、第8図2などのように8世紀にさかのぼると考えられるものも認められるが、この時期と大きく異なる特徴をもつものは認められない。

2．遺構の年代

今回の調査で発見した遺構のなかで、竪穴住居跡は出土遺物から9世紀のものと推定される。しかしその他の遺構については、出土遺物もなく時期を明確にすることはできなかった。ただし今回の調査で出土した遺物には竪穴住居跡と大きく時期の異なるものがほとんど認められなかったことから、掘立柱建物跡などその他の遺構の時期も同じ頃のものと考えておきたい。

3．まとめ

今回検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土壙4基、溝跡2条などである。いずれも調査対象区の中央付近に分布するが、遺構の密度は低く重複するものはほとんどない。竪穴住居跡は斜面の下部に位置するのに対して、掘立柱建物跡は標高の高い尾根筋に位置する傾向が伺える。ただし、調査区外の南東斜面では住宅裏の崖面に竪穴住居跡が数軒認められていることから、削平が著しく遺構が認められなかった調査区南側の標高の高い部分にまでも遺構が分布していた可能性が考えられる。したがって今回の調査区は、遺跡の北部にあたると推定される。

引用・参考文献

伊東　信雄編　(1981)：『宮城県史』34　史料集Ⅴ・考古史料

氏家　和典　(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

加藤　道男　(1989)：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』

多賀城跡調査研究所　(2001)：『桃生城跡Ⅸ』

宮城県企画部土地対策課 (1990)：『土地分類基本調査　登米・大須』

第１表　遺構属性表

掘立柱建物跡属性表

	遺構名	構造	規模（間）	総長(m)	柱間寸法（m）		柱穴平面形と規模（長軸・短軸・深さ：cm）				柱痕跡（cm）	方向
1	SB03	総柱建物・南北棟	3間×2間	5.1	北から1.9, 1.5, 1.7, 1.7	西から1.8, 1.9	隅丸方形	46～72	40～52	20～47	径16－22	N－26°－W
2	SB04	南北棟	4間×2間	10.0	北から2.3, 2.2, 2.2, 2.3	西から3.1, 2.9	楕円形	38－50	32－46	20～32	径14～26	N－17°－W
3	SB06	南北棟	2間×2間	3.7	北から1.8, 1.9	西から1.6, 1.5	楕円形	34－52	30－46	18～50	径12～18	E－35°－N

竪穴住居跡属性表

	遺構名	平面形	規模（m）	壁（cm）	主柱穴	周溝	カマド	方向	その他
1	SI01	方形	4.2×3.8	22	なし	ほぼ全周	北辺中央	N－16°－W	貯蔵穴１ヶあり
2	SI02	方形	6.1×2.5以上	25	14本？	確認部分全周	北辺中央	N－25°－W	貯蔵穴１ヶあり・外周溝あり

溝跡属性表

	遺構名	上幅（m）	下幅（m）	深さ（cm）	断面形	方向	堆積土などその他の特徴
1	SD05	0.2～0.3	0.1～0.2	10	皿状	N－24°－W	灰黄褐色シルト

土壙属性表

	遺構名	平面形	断面形	規模（短軸×長軸m）	深さ（cm）	堆積土などその他の特徴
1	SK07	隅丸長方形	皿状	0.5×1.2	18	
2	SK08	楕円形？	皿状	0.5×(1.0)	14	
3	SK09	円形	皿状	径1.0	10	黒色シルト
4	SK11	隅丸長方形	皿状	0.8×1.0	13	1層：黒色シルト、2層：黄褐色シルト

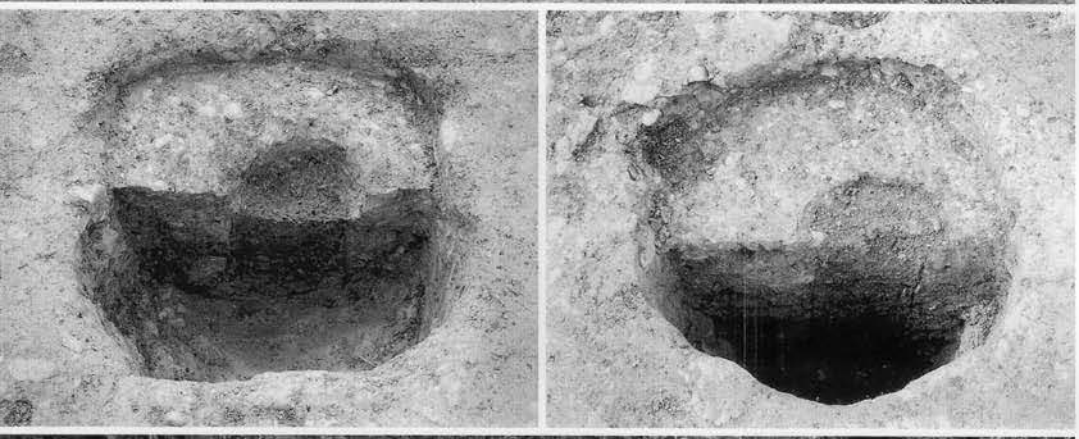
遺跡遠景（南から）

調査区全景（南東から）

ＳＢ03建物跡（南東から）

図版１

ＳＢ06建物跡（北西から）



左：ＳＢ03建物跡
　　Ｎ４Ｅ３柱穴
右：ＳＢ03建物跡
　　Ｎ４Ｅ２柱穴

ＳＩ01・02住居跡（南東から）

図版２

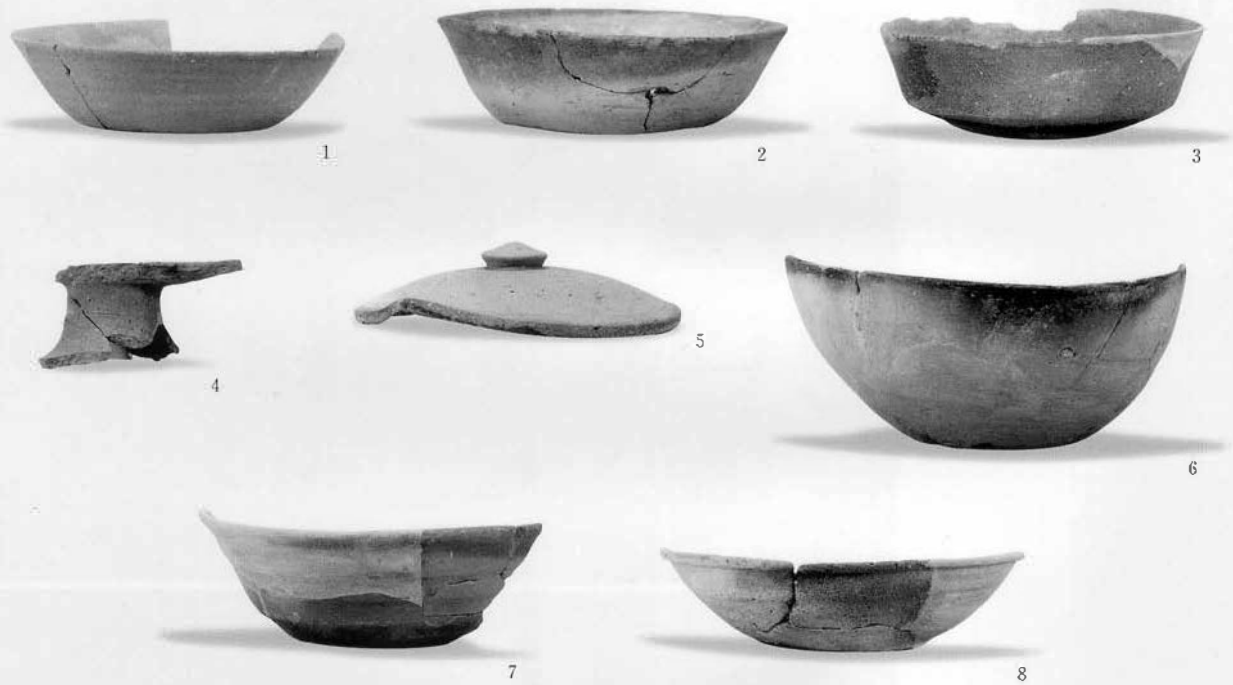
ＳＩ01住居跡（南東から）

ＳＩ02住居跡（南東から）

ＳＤ05溝跡（南東から）

図版３

S I 01住居跡
床面遺物出土状況



1：6－1（挿図番号－挿図内番号）　2：6－2　3：6－3　4：6－4　5：8－2　6：8－1　7：8－3　8：8－4
（縮尺 1/3）

報　告　書　抄　録

ふりがな	さわだやまにしいせき
書名	沢田山西遺跡
副書名	三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第189集
編著者名	須田良平
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL022-211-3682
発行年月日	西暦　2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
さわだやまにしいせき 沢田山西遺跡	みやぎけんもものうぐん 宮城県桃生郡 かほくちょうこかなこし 河北町小船越 あざさわだ 字沢田	045616	66075	38度 29分 58秒	141度 17分 25秒	20010409～ 20010420 20011001～ 20011013	2,080	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢田山西遺跡	集落跡	縄文、古代	竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条、土壙4基	土師器、須恵器、縄文土器、石器	古代の集落跡

宮城県文化財調査報告書第189集

沢田山西遺跡

平成14年3月25日印刷
平成14年3月29日発行

発行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町3丁目8番1号

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24-24